

## 老農塚田喜太郎翁

「その遺徳遥かなり」

### 安積開拓事業の礎となる」

宮下 亮善



故福島郡山安積の地にあるのかと、いよいよ興味を沸き事情を聞きおよんでいるうちに、これは是非とも墓前に額ずかなければならぬという思いを深くし予定変更する次第になりました。

「和尚さん、郡山の安積あさかに行かれるのであれば、是非、ヤドン先祖の墓に花を供えてきて下さい」、「ウーン団体旅行だから、途中から予定を変更するのは難しいですね」と、さして気にもせず会話が終わったのですが、二週間ぐらい後にまた先日の話。「ウーンその人はどんな人で何をされた人ですか」と尋ねると、現鹿兒島市谷山山田の塚田喜太郎と言

う人で、藩政時代から薩摩では農業指導者として功績をあげられ藩庁から表彰を受けられたほどの人物であると。そんな人物の墓が何

郡山（福島県郡山市）が大きく変貌するのは明治五年（1872）、熊本藩士安場保和が福島県令として赴任してからである。安場は貧困に苦しむ郡山地域を蘇らすため、猪苗代湖の水を引く「安積疎水開削事業」を企画し、担当課長職に旧米沢藩士中條政恒を任命した。この郡山（安積地域）は「水は西に流れても東に流れない」といわれる不毛の土地、猪苗代湖の水を安積原野へ疎水するという構想は江戸時代から存在していた。

福島県の開拓に呼応した地元豪商たちは明治六年「開成社」を結成し、本格的な開拓に乗り出した。このようなおり、明治九年

(1876)、明治天皇の東北巡幸の下見に来た内務卿大久保利通は福島県と開成社が進めて来た官民一体の開拓事業の立ち上げに感動して「明治近代化国家建設の礎はこの地であり」として、明治十一年(1878)三月に事業案として提出し政府は予算を計上したが事業開始目前に、紀尾井坂で島田一郎らの凶刃に倒れた。

しかしながら「大久保の夢」は明治政府初の国営農業水利事業「安積開拓・安積疎水開削事業」として、明治十二年(1879)猪苗代湖「十六橋水門」の建設を緒に明治十五年(1882)延べ八十五万人の労力と当時の年間国家土木予算の三分の一を要して、水路五十二km、分水路七十八kmが安積疎水として完成した。約四千haだった米の作付け面積は最大時一万余ha以上広がった。収穫量は約四千五百トから十倍以上へと大幅に増え実り

多き大地へと生まれ変わった。

この安積開拓事業は「殖産興業」と「土族授産」の救済を目的としており、明治十一年九藩(久留米、会津、土佐、鳥取、棚倉、岡山、松山、米沢、二本松)の五百戸数、二千人が入植した。しかしながら、開拓地では当初の意気は消沈し失望して離農しようとする者、帰郷しようとする者などが続出し、安積開拓事業は一大危機に陥ってしまった。

内務省勸農局御用掛授産地業務主管として赴任していた奈良原繁はこの実情を憂慮して、政府の松方内務卿に強く上申し、明治十三年五月開拓地営農指導者として老農二人を招請した。鹿兒島から塚田喜太郎が招かれ農耕を指導することとなった。奈良原繁の「お国のため」との懇願にこたえて甥の森元山助を伴い徒歩にて二ヶ月を要して四百数十里の東北安積を目指して現地に赴いた。



老農塚田喜太郎翁墓  
郡山市喜久田町、真言宗医王山龍角寺



大久保神社  
郡山市安積牛庭、品川萬里郡山市市長（左端）、大久保利通公玄孫洋子氏（右端）

時に六十歳 “生きて再び故郷の桜島山を見ることはあるまい” 悲壮な覚悟をもって鹿児島をあとにした。

荒土に苦心惨憺するも鹿児島でのさつま芋肥料に骨粉を施すのをヒントに骨粉施肥・肥土に混ぜた粃を播き芽が出た頃田圃に水を引くという「塚田式直播法」を確立させた。

三年目に従来の十倍の収穫をした。土族農民たちは一気に活気づき、当時牛馬が死ぬと野山に捨てていたものを遠くまで泊まりがけで骨集めに奔走する。もの凄い悪臭にあちこちの村々から出る苦情も物ともせず臼でひいて骨粉づくりに努力した。気位の高い土族農民たちが本物の農民になったといわれた。

苦節十年 “自分の墓は西の方の鹿児島に向けてくれ” が遺言であったという。

明治二十三年二月二十一日。享年七十歳。

医王山龍角寺墓域に永眠。

法名 喜悅院釈善種義讚清居士

鹿児島県薩摩国谷山郡谷山村大字山田

頭官大久保利通公と一介の農民塚田喜太郎翁が共に明治近代国家建設一大事業に貢献し、今日の郡山市発展の基礎を築いた。

「喜太郎ドンは温厚篤実で怒ったことのない仏のような人だった」と。

郡山は “鹿児島に恩はあっても恨みはありません” 現郡山市長品川萬里氏の言葉。

その遺徳遙かなり

安積開拓事業の礎となる

(天台宗大雄山南泉院住職)